

文化・文芸

✉bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

知性による支配へ反発



約20年前に米国カリフォルニア州に移り住んだ詩人の伊藤比呂美さんは、米大統領選でドナルド・トランプ氏が当選した理由を今も考え続けている。

「メキシコからの移民は米国に麻薬と犯罪を持ってくる。強姦者だ」
そんな差別的で排外的な言葉をあからさまに語るトランプ氏。人間としてのおぞましさが表れている、と伊藤さんは考えていた。

だが、犬の散歩で毎朝訪れる公園では不法移民とみられる人たちが野宿をしている。ビール瓶が散乱し、大便や使用済みの避妊具も落ちている。「彼らに強い嫌悪感を抱き、取り除きたいと思ってしまう人がいる。そう思わないよう私たちは教育を受けてきた。でも、思ってしまうのは理解できる」

伊藤さんは移住の際、先輩の詩人に推薦状を書いてもらうなど、苦勞してグリーンカード



詩人 伊藤比呂美さん

「弱者がより弱者を攻撃」移民間で分断

（永住許可証）を獲得した。税も負担している伊藤さんのような「合法移民」にとつて、コストを負わない不法移民に仕事まで奪われたら……。同じ移民の間に分断が起きてしまう状況だ。

「弱い立場にある人間が、より弱い人間を攻撃してしまう。そういうエネルギーが彼を大統領に押し上げたのではないか」

米外交専門誌「フォーリン・アフェアーズ・リポート」。11月号の特集は「欧米のポピュリズムが収束しない理由」だった。移民や難民の排斥を訴える政治勢力の台頭に光を当てた。ポピュリズムとは何か。

ジョージア大学准教授で国際関係論が専門のカス・ムッデ氏は、敵対しあう二つの集団へと社会を分裂させるイデオロギーだ、と定義する。典型的なのは、一方に「無垢な人々」、他方に「政治的に腐敗したエリート」を対置する構図だ。

日本でも数年前、ポピュリズムをめぐる議論が起きた。橋下徹・大阪市長（当時）らの人気がなぜ高いのか、との問題意識からだった。当時注目された論者の1人が、米国のポピュリズムを「反知性主義」というキーワードから読み解いた宗教学者



宗教学者 森本あんりさん

エリート非難しながら自分の既得権擁護

の森本あんり・国際基督教大学教授だ。

「知性」そのものへの反対ではなく、本来は神の前ではすべての人々が平等であるという信仰心を基盤にした、「知性が特定の権力と固定的に結びつくことへの健全な反感。それが反知性主義だと、森本さんは説いた。エリート大学の出身者が社会の上層部を占め、自分たちの子を再びエリート大学に送り込む。そうしたもののへの反発だ。今のトランプ現象をどう見ているのか。

「移民の国で『移民は出て行け』と言ったら、残るのは先住民だけ。米国における移民排斥とは、『自分は定住者になった』と認識する人々が後から来る貧しい移民を排除する構図をとる。既得権の擁護です」

エリートの既得権を攻撃しながら、「先行者」たちの既得権を擁護する存在でもあるトランプ氏。「ただし、彼自身が権力者になったら、自らも『権力批判』の対象になる。とりわけ自分の身内をひいきする行為は、ポピュリズムの根底にある平等の重視と衝突します」

社会学者の竹内洋・関西大学東京センター長は、学者を「現実を知らない役立たず」と批判



社会学者 竹内洋さん

「感情的な言動に正面から向き合え」

することで支持を広げた橋下氏の例に注意を促す。ポピュリズムとは「情念の政治」であり、支持層の中には知への憎しみがひそんでいたと見る。

「知を持つ者が持たない者を支配する構造のもとでは、支配される側に憤懣が生まれる。知がはらむ暴力性に敏感になった方がいい」

明治以降、富国・成長を目指した日本には、学歴があれば得をする、つまり、知には実利が伴うと期待できる状況があった。「誰でも知的存在になれる」と信じられたから、建前としては知を尊重しようという合意できた

だが、エリート層とそれ以外の格差が再生産されるようになる。知の民主化は幻想だと気づく人が増え始める。それとともに、建前を軽視する動きが広がってきたという。

分断の間を架橋するような知は構想できるのか。「難しい」と語ったうえで、こう付け加えた。

「少なくとも、感情と知を二分法で捉える発想からは離れる必要がある。どんな知性も感情を土台にしているし、感情的に見える言動の中にも洞察はある。トランプ的で粗暴な批判。それに負のレッテルを貼るだけではなく正面から向き合うことから、始めるしかない」

（編集委員・塩倉裕、赤田康和）

トランプ次期米大統領の登場を、三つの文脈から考える。